

セーレン・キェルケゴールにおける 《心理学的実験》の構成とその方法論的意義

平 林 孝 裕

1. 問題設定

キェルケゴールの《実験》、より正しくは《心理学的実験》は、従来の研究において、必ずしも注目されてこなかったし、またその意義を十分に評価されてこなかったといえるだろう。キェルケゴールの著作で用いられる諸概念を解説した手引書でも、「実験」という表現を取りあげたものが見あたらないことはそのような事情を端的に物語っている（cf. Malantschuk 1993；Watkin 2001）。

《実験》という表現そのものが、今日の私たちにとってきわめて馴染みの言葉となっているために、このような取り扱いとなっているのかもしれない。しかしながら、実際、《実験》が何を指すかを私たちが正しく理解しているとも、キェルケゴールの著作でそれが明快に示されているとも断言しがたい。

これまでのキェルケゴール研究においても《実験》という主題は十分に検討されてこなかった。もっとも包括的にキェルケゴール心理学の解明を試みたノーアントフトは、この言葉のためにわずか3頁程度の紙幅（Nordentoft 1995, 32-35）を割くにすぎないし、また《実験》という方法をキェルケゴールが明示的に実践した2つのテキスト、『反復』と『責めありや？—責めなしや？』を主題的に扱ったヘンリクセン（Henriksen 1954）も、これにほとんど注意を払っていない。いわば《実験》の研究は、ほとんど空白のまま放置されている⁽¹⁾。

この事実は、《実験》がキェルケゴール思想において重要でないことを示すのだろうか。必ずしもそうとは言えないだろう。たとえばマランツクが、心理学的実験の著作活動における重要な意義を強調していることが想起されよう（Malantschuk 1990, 30-40）。筆者はすでに、キェルケゴール心理学の方法としての《実験》に焦点をあて、その輪郭を描き出すことに努力したことがある（平林 2003）。その拙論において《実験》がキェルケゴールにおいて真理伝達の方法としての重要な意味をもつ点を示唆しておいた。

(1) 筆者の知る限り、これまでに「実験」という表題を冠された研究書が一冊だけ刊行されている。エーエベア編『諸実験 キェルケゴールの著作活動におけるさまざまな読み』（Egeberg 1993）である。本書は1992年にオーフス大学で開催されたキェルケゴール・シンポジウムの記録であり、7編の論文を含んでいる。しかしながら、本書に収録される諸論考は、「キェルケゴール読解の実験的試み」ではあっても「実験についての研究」ではない。ハリッツの論文に「心理学」「実験」への言及が散見されるが、決して立ち入ったものではない（Harrits 1993, 13；25）。

本論文では、さらに考察をすすめて、《実験》の構成を解明することによって、従来かえりみられることの少なかった、その方法論的意義に論究するよう試みることにしたい。

2. 心理学的実験

まずキェルケゴールの実験が、どのようなものであったかを確認することから始めよう。今日、わたしたちが実験と言うとき、「実際に試み、考え方の正否を調べること」、とくに「自然科学で、特定の現象や関係を研究するため、人工的な一定の条件を設定し現象を起こさせて、観察し測定すること」（三省堂『大辞林 第二版』）といった、その経験的な性格を重視する定義において理解している。

しかしながら、キェルケゴールにおける《実験》は、私たちが前提とする経験性を必ずしももっていない。それは文学的な創作であり、「仮想的な構成」[imaginary construction]（Hong & Hong 1983；Hong & Hong 1988）にほかならない。

この苦悩の物語を創作するにさいして、わたしが念頭においていたのは、これを一つの実験として遂行することであった（SKS 6, 406）。

（傍点引用者）

心理学的実験は「非現実的な構成」[uvirkelige Constructioner]（SKS 6, 179）なのであるから、キェルケゴールが『反復』や『責めありや？—責めなしや？』で報告する出来事は、実際に起こった事柄の報告ではなく、ある文学、作り話と考えるのが適当である⁽²⁾。

一般に私たちは「作り話」といえば、うそ臭い、一段と劣ったものと考ええる傾向にある。現実的なものこそ価値あるものだと考え、まずそれが、実際に起こったか否かという意味で「現実的な根拠」（SKS 6, 412）を提示するように求めがちである。

これに対して、キェルケゴールは、《実験》がいわゆる現実性＝経験的事実性をこえた現実性を有すると主張する。つまり《実験》は、かれの言うところの「諸範疇」や「理念性」という、個々の偶然的な事情を超越して、すべての人間に関係する重要な問題をその根拠としてもっているというのである。キェルケゴールが述べる「現実的な根拠」は、すべての人間に抜き差しならぬ仕方では捉えられるという意味で《現実

(2) 《心理学的実験》が、キェルケゴールと結び付けられた創作の形式として一定の認知を受けていた証拠がある。19世紀後半に人気を博した作家であるライアセン（Christian Frederik Reiersen）は、ヒラリウス・ヴィクトーア（Hilarius Victor）という仮名で『夢の国から』（Hilarius 1862）という小説を発表している（Bogh 2003）。この小説は副題に「実験的心理学の試み」とあり、またここで用いられた仮名は、まさにキェルケゴールの仮名（Hilarius Bogbinder [『人生行路の諸段階』の仮名著者]と Victor Eremita [『あれか—これか』の仮名著者]）のパロディと推測される。

性：リアリティ》をもつのである。

《実験》のリアリティの根拠は、さしあたり「諸範疇」とか「理念性」と呼ばれていた。このリアリティの根拠についてキェルケゴールはこう述べている：

『責めありや？—責めなしや？』という心理学的実験では、絶望までに至る精神の極度の危機にさらされて緊張状態にある人間が描かれているが、その全体はまるで昨日おこったかのように維持されている。……その実験者は、まとまりをもった人生観 [Livsanskuelse] を理論的に展開して、いかに全体がつながりあっているかをまったく冷静に示している。(Pap. VII 2 B 235, 15-16)

「諸範疇」「理念性」という表現で示される事柄は「人生観」であることが、この一文から明らかとなる。《実験》は、そのような人生観を読者に提示するために構想された創作なのである。

3. 実験という文学装置

《実験》という虚構にすぎない創作に読者の関心を惹きつけ、その理念性に着目させて、実験にリアリティを与えるために、キェルケゴールはさまざまな仕組みを整えている。

3.1. 《謎》

心理学的実験は、秘密に満ちた出来事から始まる。

たとえば『反復』では、仮名著者コンスタンチン・コンスタンチウスが「ある青年」のメランコリーに注目するところから実験が動き出す。この青年は一人の女性に恋をし、その愛を打ち明けた。そしてその想いは成就したにもかかわらず、青年はかえって憂鬱になってゆく。普通であれば想いがかなったのだから、喜ぶべきはずなのであるが、奇妙なことに、この青年は読者の予想を裏切って苦悩するのである。したがって『反復』の仮名著者コンスタンチウスが「スパイ」きどりで (SKS 4, 12)、あの青年と関係を深めていくのは理由がないことではない。そこには暴かれ明るみ出されるべき謎があるからこそ、コンスタンチウスのスパイごっこも可能だからである。むしろそのようなコンスタンチウスの態度こそが、そこに謎があることを際立たせるとも言える。

また、『責めありや？—責めなしや？』は、シェラン島北部・セーボー湖の湿原から、立派な木箱にイニシャルだけが記され誰の手になるともわからない冊子を、仮名著者フラター・タシトゥアヌスが発見するという報告から始まっている (SKS

6, 175-179)。しかもその冊子とともに意味深な装飾品や宝石までその箱には収められていた。そして冊子の内容は、一人の女性を誘惑する「クイダム」の日記体の報告であり、また、そのタイトル自身が、犯罪を思わせるような奇妙なものであることに私たちは注意を払うべきである：

『苦悩の物語』のタイトルは「有罪か—無罪か」[Skyldig? —Ikke-Skyldig?] である。この疑問符は法廷で取り扱われるべき問題を明らかに示唆している。おそらく小説家は、このタイトルにギョッとしたであろう、……。 (SKS 7, 263)

キェルケゴールは「この湖から秘密を奪った」とタシトゥアヌスに言わしめているが、このように実験は《秘密》、《奇妙な事柄》を発端としている。読者に《謎》を提示することによって、その謎解きへと誘うのである。

かくして読者は、実験で展開される謎解きに付き合わされることになる。事件の行く末を見極めるために、まるで犯人探しをするように読者は関心を持続していなければならない。そして、そのように実験は仕組まれている。

3.2. 匿名性

二つの心理学的実験は共通して、時間や場所その他についての比較的仔細な報告を読者に与えている。日付や時刻などを明示した書簡体や日記体の叙述は、そのような関心の高さをもっとも明快に示す。実験における細部への関心はこれにとどまらない。

たとえば『反復』の場合では、コンスタンチウスのベルリン旅行の際に、ベルリンの首都劇場の舞台演目を論じ、さらに今日では誰かをも調べるのが難しい舞台俳優について論評をくわえている。また、『責めありや?—責めなしや?』の場合は、キェルケゴールが生涯をすごした19世紀コペンハーゲンのきわめて具体的な地名、「ランゲブロー橋」「クリスチャンハウン」「ビャーネブロ橋」に言及し、その周辺の鮮明な情景を描き出している。そのような描写から滲むのは、実験者、より正確には実験観察者の細部への関心である。そしてこのような関心からもたらされた描写は、実験の事実性を裏打ちする方向に役立っている。

しかしながら、これとは全く対照的に、実験者が観察の対象としている当の人間については、いかにも茫漠とした輪郭しか描かれていない。確かに、その心理描写には、同様の細部への関心が活かされているかもしれない。けれども、その実験対象が、誰でもどのような人物であるか、また、その生い立ちや生活の背景はほとんど無視される。

実験で描かれる人物がいったい何者であるのか、『反復』ではコンスタンチウスのわずかな証言しか得られないし、『責めありや?—責めなしや?』ではタシトゥアヌスの報告からほとんど何も明らかにならない。言ってみれば、ここにはひとつの空白

が設けられている。その空白を象徴するように、実験対象は「ある青年」[et unggt Menneske] (SKS 4, 11) と呼ばれ、さらにはクイダム [quidam] (SKS 6, 412) すなわちラテン語で「何者か」という表現に置き換えられる⁽³⁾。クイダムとは「詳しい特性にかかわらず、ある人物をさす、男性の不定代名詞」(SKS K 6, 364) であり、そもそも誰なのか判然としないし、もしかしたら誰でもよいかもしれない場合に使われる言葉である。別の言い方をすれば《X氏》なのであって、これもひとつの謎だと考えられる。

実験に見られるのは、克明に描き出される背景とあまりに漠然とした人物像との不均衡であり、その人物に盛り込まれた委曲をつくした心理描写である。そのような不均衡は、また読者を、「この人物はいったい誰なのか」という問いへと促してゆく。この問いは、さらに空白を埋めるように読者に問いかけてゆくことになる。

3.3. 空白の結論

これまで論じた二つの点は、いわば読者を実験に注目させ、惹きつける要素であった。読者に引力として働きかけるものとしての《問い》であった。そして問いは当然のことであるが、《答え》を要求する。いやむしろ読者は《答え》を暗黙のうちに実験に要求していたからこそ、この実験に仕掛けられた問いに、ながながと付き合ってきたに違いない。先に引用した箇所 (SKS 7, 263) で、「この疑問符は法廷で取り扱われる問題をあきらかに示唆している」と評された『苦悩の物語』を「読者諸氏は結末を楽しみして、この本を覗いたことだろう」(SKS 6, 263) というとおりである。

ところが、実験はそのような読者の期待を裏切り、突き放す。

『反復』は、青年の恋が成就しないという意味でも⁽⁴⁾、その論述の展開方法という点においても、結論が——少なくとも読者の期待するようには——与えられていない。コンスタンチウスによれば、この本の論述に「1、2、3、という展開をみることは徒労におわる」のであって、むしろ「論述は反対向き [invers] に展開する」と主張される (SKS 4, 92)。スパイ小説や探偵小説ならば、最後に必ず秘密の暴露があるはずだが、もしそれが反対向きに展開するとすれば、謎は深まるばかりであろう。事実、『反復』という著作では、明確な結論が提示されてない⁽⁵⁾。

クイダムの物語にしても同様である。「ここで今回の日記はお仕舞いである。この

(3) 『反復』において、「ある青年」の手紙のあて先が「N・N様」[nomen nescio (lat.) の略] (SKS 4, 89) となっているのも同様の趣向であると思われる。

(4) コンスタンチウスは『反復』の終章で次のように述べている：「いつでも枕もとの机にある本の結末だけを読んで、愛し合う二人が結ばれるかだけを知りたがる好奇心旺盛な女性読者は、きっと失望するだろう、……そう、わが友は、だれとも結ばれないのだ。」(SKS 4, 91)

(5) 『反復』の準備稿をみると、キェルケゴールは、本書の副題を「実りなき試み」[et frugtløst Forsøg] とすることを検討していたことがわかる。この事実も、結論の放棄が意図的であった一つの証拠と考えられる (Pap. IV B 97, 1)。

日記は何も問題にしていない。……何の内容もない」(SKS 6, 368)との最後の記述によって、あきらかに結論は放擲されている。まさに結論は棚上げされているのであって、「わたしの実験は終わっていない。つまり結論がないのだ」(SKS 6, 408)と言わざるを得ない。

わたしたちの知っている実験は、定義によれば「実際に試み、考え方の正否を調べること」であるから、結論に達し、その正否を問うためにこそ遂行されるはずである。しかし、キェルケゴールの実験では、その定義に反して結論・結果を与えられることがない。

そのような結論・結末の欠如は実験の失敗を意味するのだろうか。むしろキェルケゴールは「結論とは外的な何かにすぎない」と述べて、結末を示すことに消極的である。かえって「結論の棚上げこそ内面性の規定だ」とすら発言する。結論はきわめて意図的に回避されるのである。まさしく「終わりがいいこと、結論がないことは偶然などではない」(SKS 7, 263)。

4. 実験における可能性と現実性

実験は、その契機としての《謎》を提示し、さらに空白としての《人物像》(「ある若い男」や「クイダム=X氏」)を登場させることによって読者の興味を喚起し、実験へと引きずり込んだのちに、最後になって謎解きを、より正しくは結論や結果へ至ることを回避してしてしまう。いわば読者は、実験に付き従ってきた観察者は《宙り》の状態、きわめて座りのよくない不安定な状況に置き去りにされてしまう。そのような読者の窮境は偶然ではなく、むしろ意図的にもたらされている。実験には、誤解を恐れないで言えば《実験者の罠》が隠されているといっていよい。

一般に、読者が小説や物語を読む際は、その登場人物に注目して、つぎは何が起こるのか、どのように登場人物たちが行動するのかだけに関心を払い、それを読者自身の事柄とは考えない。スパイ小説や探偵小説であれば、読者であるわたしたちは、これらの小説の登場人物のようなスリルや危険に満ちた生活を送ってはいないし、また送るつもりもないにちがいないから、まったくの他人事として、作り話の世界の事柄として、たとえばジェームズ・ボンドのしたこと、シャーロック・ホームズのしたことを傍観するにすぎない。また、現実の出来事としての報告であれば、いつどこで、だれが何をしたが、事の成り行きはどうであったのか、というきわめて具体的な個別の知識にわたしたちの関心は向かう。そして、それら知識は《自分ではない》特定の誰かの事柄として語られるにとどまる。

けれどもキェルケゴールの《実験》では、少々事情が異なっている：

『人生行路の諸段階』(342頁)⁽⁶⁾では次のように言われている、《それは可能 [muligt] か、わたしにはそれができるのか》と問うのは精神 [Aand] である。《それは本当 [virkeligt] か、隣のクリストファーセンはそれをしたのか、本当にしたのか》と問うのは精神が欠けている [aandløst]。(SKS 7, 294)

(傍点引用者)

『人生行路の諸段階』ということの名指しされているのは「クイダムの物語」、すなわちキェルケゴールの心理学的実験である。実験をめぐって二つの問い、現実性にかかわる《それは本当か?》との問いと、可能性にかかわる《それは可能か?》との問いを対比して見せることで、キェルケゴールは実験の眼目の照明を試みる。

《それは本当か》と問うのは「知的なものへの関心」(SKS 7, 293) からであって、それは事柄に「データ」(SKS 6, 406) として客観的に、つまり第三者的に関わる態度である。わたしたちは《それは本当か?》と思いをめぐらすとき、事実かどうか虚構ではないか問いかけ、また事実であるとすれば「誰それが何かしたのか」と、わたしたちは得心するにとどまる。しかし、そのような態度は「精神が欠けている」と糾弾されるのだ。

周知のように「精神」という言葉には、キェルケゴールのテキストにおいて決定的な意味が込められている。「人間は精神である」(『死に至る病』の冒頭) とのテーゼは余りにも有名だが、このテーゼは「人間が精神である」という、たんなる事実命題ではなく、むしろ「本来、人間は精神であるべきだ」との要請、当為命題と理解されるべきである⁽⁷⁾。だとすれば、《それは本当か》と問うのは、人間の本来的な姿を目指した態度でないとの判断を含意することになる。

翻って、本来的な人間の姿を求めつつ問うとすれば、《それは可能か、わたしにはそれができるか》と、実験においては問われなければならないことが示唆されている。実験に付されている問題を自分の可能性として、わたしの《可能的な現実性》として考えるべきなのであって、「倫理的に生きる主体は、自分の現実性において自分に問いかける」(SKS 7, 293) のでなければならない。すなわち、そのような問いかけの切迫感をもって、他人事でない《リアル》な問いとして実験を受けとめるべきなのである。

そのような《リアル》さへ、《可能的な現実性》へと誘^{いざな}い、その目的の遂行のために捉えて離さないように実験は仕組まれている。謎が読者の関心を惹き、実験へと深

(6) SKS 6, 407.

(7) 「人間は精神である」との命題が事実にすぎず、当為的でないとすれば、キェルケゴールが、不安や絶望の分析においてその無精神的な形態について論ずる必要はなかったであろう。

入りするように誘惑する。そして読者にとって他人事とならないように、慎ましやかに匿名の登場人物は《X氏》として物語の進行をみちびく。最後にいよいよ結末という段になって、読者を謎とともに放置するのが、実験の戦術なのである。

読者の選択肢は、おそらく二つしかない。そのまま結末を知ることなく宙吊りのまま諦めるか、もしくは——それこそキェルケゴールの思う壺なのだろうが——今度は実験を引き受けて自分で結末までたどるか、……この選択は読者にゆだねられている。そして後者を選んだとき、「わたしのゲーム [= 実験 (引用者)] の参加者は、いまやあの古い格言、ソノ話ハ君ノコトヲ言ッテイルノダ [de te narratur fabula] を理解したものとなる」(SKS 6, 440)。

5. 結 論

ここでわたしたちは、キェルケゴールの《心理学実験》が何であったかを想起しなければならない。《実験》は、今日のわたしたちの理解と異なって虚構であり、文学的な創作であった。しかし、その創作は、まったく気ままに展開された《作り話》ではなく、ある規定性に準拠して、キェルケゴールの言葉では「諸範疇」「理念性」もとづいて創作されていた。そしてその規定性こそ「人生観」であった。実験とは、そのような人生観の文学的展開である。

ある人生観がそのまま純粹に示されても、それが現実味をもってわたしたちに迫ってくることは少ないだろう。そこにはしばしば《リアリティ》が欠けている。したがって、ある人生観を人々にリアルに理解してもらうためには、それなりの工夫が不可欠である。そのような工夫、戦術こそが《心理学実験》なのである。実験を介してある人生観を読者にとってリアルに、その「可能的現実性」として体験させ、今日的な表現をすれば^{ヴァーチャル}仮想的な現実体験——それは確かに心理的なものに過ぎないが——をもたらす。このようにしてもたらされた現実体験は、人生観に依拠した生の現実の帰趨を読者に見極めるように促すのである。

キェルケゴールは「わたしは現実の物語 [virkelige Historier] のかわりに実験 [Experimenter] を好んで用いてきた」(SKS 20, 409 [Journalen NB 5: 91]) との日誌記述をのこしている。キェルケゴールは、実験のこれまで考究してきた方法論的な意義にきわめて自覚的であった。それゆえ、わたしたちは心理学的実験の重要性をあらためて確認しなければならないだろう。

本論の一部は、すでに日本宗教学会大会（天理大学、2003年9月）で口頭発表されている。今回の発表に際して、その内容に大幅な補筆訂正をくわえている。

【凡 例】

キェルケゴールのテキストは原則として、現在刊行中の以下の批評的新版全集（略号、本文はSKS、注釈はSKS K）から引用するものとし、引証箇所をその巻数と頁で示した。

Søren Kierkegaards Skrifter, udgivet af Søren Kierkegaard Forskningscenteret, København: Gads Forlag, 1997-.

また、キェルケゴールの『日誌・遺稿集』からの引用のうち、新版全集で現在までに未刊行であった箇所は、従来通り、『日誌遺稿集（第二版）』（略号、Pap.）を参照し、巻数、分類、整理番号、必要に応じて頁数をもって示した。

Søren Kierkegaards Papirer, 2. udgave, udgivet af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, forøgede af N. Thulstrup, bind. I-XVI, København: Gyldendal, 1968-78.

【引証文献】

- Bogh, Nic. 2003 (1899). Reiersen, Chr. Fred., *Dansk biografisk Lexikon*/XIII Bind. Pelli-Reravius, Online, Project Runeberg, 9. Feb. 2004.
- Egeberg, Ole (red.) 1993. *Experimenter: Læsninger i Søren Kierkegaards Forfatterskab*, Aarhus: Forlaget Modtryk.
- Harrits, Flemming 1993. Om *Gjentagelsen* i Søren Kierkegaards Forfatter-virksomhed, in Ole Egeberg (red.), *Experimenter: Læsninger i Søren Kierkegaards Forfatterskab*, Aarhus: Forlaget Modtryk, pp. 9-38.
- Henriksen, Aage 1954. *Kierkegaards Romaner*, København: Gyldendal.
- Hilarius, Victor [c: Christian Frederik Reiersen] 1862. *Fra Drømmens Land: Et Forsøg i den eksperimenterende Psychologi*, Kjøbenhavn: C. A. Reitzel.
- Hong, Howard V., & Edna H. Hong 1983. Historical Introduction, in *Fear and Trembling/Repetition* (*Kierkegaard Writings*, VI), edited and translated by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton: Princeton UP, pp. ix-xxxix.
- . 1988. Historical Introduction, in *Stages on Life's Way* (*Kierkegaard Writings*, XI), edited and translated by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton: Princeton UP, pp. vii-xviii.
- Malantschuk, Gregor 1990. *Dialektik og Eksistens hos Søren Kierkegaard*, 2. oplag, København: C. A. Reitzels Forlag.
- . 1993. *Nøglebegreber i Søren Kierkegaards tænkning*, udgivet af Grethe Kjær og Poul Müller, København: C. A. Reitzel.
- Nordentoft, Kresten 1995 (1972). *Kierkegaards Psykologi*, København: Hans Reitzenls Forlag.
- Watkin, Julia 2001. *Historical Dictionary of Kierkegaard's Philosophy*, Lanham: The Scarecrow Press.
- 平林孝裕 2003. 「S. キェルケゴールの心理学的方法——《心理学の実験》をめぐって——」『神学研究』（関西学院大学神学研究会）第50号，105-117頁。